

「五十里洪水から村人を救った木」 下小倉の大杉と下ヶ橋の三又榎

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

栃木県は、災害の少ない県といわれるが、それでも記録に残る災害は、多少ある。平成二十三年の東日本大震災は記憶に新しい。その他昭和二十四年の今市地震、明治三十五年の足尾台風、江戸時代享保八（一七二二）年の五十里洪水等がある。中でも五十里洪水は、栃木県の自然災害史上最大級のものである。

五十里洪水は、五十里湖が決壊したことによる。その五十里湖は、天和三（一六八三）年九月二日の大地震で男鹿川右岸の葛老山が大きく崩れ、土砂が男鹿川をせき止めて出来上がった堰止湖である。その規模は、最大幅九〇〇メートル、最長約五一キロメートル、最大深度約四七メートルであり、現在の五十里湖に匹敵するものであったという。この五十里湖が、享保八年に決壊し大洪水を引き起こしたのである。

享保八年八月七日から四日間、現在の栃木県北地方から福島県会津地方にかけて大雨が降り続いた。

五十里湖は満水となり、八月十日には会津藩の懸命の水抜きにも関わらず湖水堤が決壊した。濁流は、奔流となつて一気に鬼怒川を下り、鬼怒川沿筋のみならず、さくら市から東へ流れ五行川筋へも押し寄せた。死者の数、流失家屋数、被害金額等は、明らかでないが、洪水の範囲は、現真岡市二宮辺りまでの鬼怒川および五行川沿岸までの広範囲に及んだ。

未曾有の災害に遭遇した人々は、災害の記憶を後世に伝えようとしたのであろう、被災地域には今もさまざまな言い伝えがある。その一つに、洪水から人々を救ったとされる下小倉の大杉と下ヶ橋の三又榎がある。

下小倉の大杉は、下小倉下組の水田の中、少々盛り上がった所にある。樹齢は推定四百五十年といわれるから、五十里洪水時には樹齢百五十年と推定される。洪水時には、一面濁流の中、この大杉のある所だけは水に浸からず、近くの人々がやってきて



水田地帯の中にある
下小倉の大杉



郷間家の屋敷地にある
下ヶ橋の三又榎

助かったという。ちなみに現在の大杉は、高さ約一八メートル、幹回り約三・八メートルあり、豪雪地帯に見られる枝が垂れ下がる独特な樹形をしている。

下ヶ橋の三又榎は、東下ヶ橋の中ほど、郷間家の母屋背後にある。

郷間家は旧家であり、洪水以前より居住しており、三又榎は当時も母屋背後あつたと思われる。現在の三又榎は、その名の通り地上約二メートルの所で三本に分かれている。樹齢は約五百年と推定されるから、洪水時の樹齢は推定約二百年である。当時すでに立派な榎として成長し、現在のように三又になつていたと思われる。五十里洪水での東下ヶ橋の被害は、記録によると「家二十五軒、五人流死」とある。ほとんどの家が流されるといふ大打撃を受けたと思われる。言い伝えによると、老人や女子どもを救うため、最後まで残つた男たちが逃げ遅れてしまった時、誰かが「三又榎に登れ」と大声で叫んだという。その声で、男たちは三又榎に登り難を逃れたともいう。

下小倉の大杉も下ヶ橋の三又榎もともに栃木県の名木百選に選ばれている。また大杉は宇都宮市指定の三又榎は栃木県指定の天然記念物となっている。大杉も三又榎も五十里洪水の際住民を救つたという由緒ある木でもある。それだからこそ地域の人々は、五十里洪水を忘れないために大切に保護してきたものもある。